**「骨子」の穴埋め　日本人の倫理観の特徴（たたき台）**

2017年5月27日　小林

これまでの研究資料から、日本人の倫理観に関係すると思われるものを広めに採録した。

なお、私見を所々で述べている。討議したく思います。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 資料 | 内　　容 | 分類 |
| S6.18 | 鈴木大拙「禅と日本文化」：禅宗からの影響は、清貧的、禁欲的、無執着。  \*私見：確かにこれらは日本人の心のあり方として好ましいと思われている。これらは倫理観・ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽ意識になんらかの影響（功&罪）を与えているように思うのだがどうだろうか。 | 仏教 |
| 〃  S8.22 | ﾙｰｽ･ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ「菊と刀」：西洋の罪の文化と日本の恥の文化。恥を恐れて不正をしない。その反面、日本人は人の目がない所では不正にはしる傾向あり。（ただし、このﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ説には反論あり－下記K11.26）  \*私見：ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ説は一部正解だが、武士道等々の倫理観を考慮しておらず、そっちのほうがむしろ主要ではないか。人の目がなくても不正を思い止まる倫理観を持っている。ただし、完全ではないが。 | 恥の文化 |
| 〃 | ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ：「刀」は自己責任を象徴するものとのこと。日本人は自己責任好きなのだろうか。  \*私見：最近、自主避難者の帰還は「自己責任」と言ってたたかれた大臣がいたが、確かに武士道の考え方は「自分でやったことの責任は自分でとる」なのであろう。しかし、やむなく自主避難した人の窮状に共感できないのは倫理観の欠如なのであろう。武士道の精神も功&罪あり。発揮のし方を間違えば倫理観を疑われる。武士道にも「武士は相見互い」の精神あり。 | 武士道 |
| 〃 | 中根千枝「タテ社会の人間関係」：日本の集団は序列によるタテ社会。序列によって集団を維持する意図が強まる。  \*私見：これはまさに権威主義におちいる傾向が強いということなのであろう。 | 権威主義 |
| 〃 | 土居健郎「甘えの構造」：日本人の精神構造には甘えがあり、甘えの関係にある人どうしでは不正を見逃す（下記K9.19も） | 甘え |
| S7.21 | 新渡戸稲造「武士道」：勇とは義（ただ）しき事をなすこと。卑劣な行動や振る舞いは嫌われる。がまんすることが美徳。その反面、儒教の影響から権威主義的で上位者への服従がよしとされる。 | 武士道 |
| S8.22 | 李登輝「武士道解題」：  武士道の中心は名誉であり、自己の名誉を守るため卑怯なまねはしない。  忠義を人倫の最高位にすえたのは日本人だけ。外見的ストイック主義。  義を重んじ誠をもって率先垂範・実践する精神。 | 武士道 |
| S9.19 | 大倉幸宏「昔はよかったと言うけれど」  日本人のモラルは戦前にくらべ格段に高まっている。  \*私見：モラルは状況に応じたもの。民主主義が発達すれば一般的にはより高いモラルが要求されるのではないか。 | 道徳 |
| 〃 | ｴﾙﾄｩｰﾙﾙ号事件に際し日本人が見せたやさしさ・思いやり・自己犠牲。  \*私見：情けは人の為ならず・因果応報という仏教の考え方の影響なのか。そうであれば、因果応報思想は不正を抑制する要因になるのであろう。 | 仏教 |
| S10.30 | 坂東眞理子「日本人の美質」：震災時に日本人が見せた忍耐心、自己コントロール力、責任感、隣人愛、助け合い。その一方でﾄｯﾌﾟの頼りなさ、決断力のなさ、保身、判断力のなさ。  \*私見：物事には両面あり。武士道、仏教などなど日本の文化には良いところがあると同時に悪いところもあるのであろう。ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽ違反防止のためには悪いところをしっかりと自己認識することが必要。 | 日本人 |
| 〃 | 川口ﾛｰﾏﾝ「住んでみたﾖｰﾛｯﾊﾟ」：日本には、和を以て貴しとなすの精神が生きている。  \*私見：和の精神は良いところあり。その反面、合意することを重んじ、違法と思っても反論しない姿勢につながっているのではないか。 | 和 |
| S11.25 | 鈴木賢司「日本人の価値観」：日本人は人づきあいで他人に合わせる傾向が強い。  \*私見：和の精神か。この性格が違法と知っていても多数意見に付和雷同する態度になるのだろうか。 | 和 |
| 〃 | 「浄土真宗の基礎知識」：仏教の目的は迷い（煩悩）を転じてさとりを開く（よろこびを得る）こと。  \*私見：さとりは個人的な内心の出来事。日本仏教（特に禅宗）は他人への関心が薄いのか。これに対し、一神教は逆、価値観の押し売り的な性格が強い（ｷﾘｽﾄ教、ｲｽﾗﾑ教）。日本人の倫理観は他人への関心が薄いので「われ関せず」的な態度をとる傾向ありなのか。 | 仏教 |
| S3.29 | 岸田秀「よみがえる武士道」：世間体を守ることが道徳の基盤であり、道徳から外れると体面を失い恥をかくことになる。（ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄと同趣旨の恥の文化） | 恥の文化 |
| 〃 | 富岡幸一郎「新渡戸稲造「武士道」の再発見」：(1)仏教からの影響は、運命に任すという平静な感覚、不可避に対する静かな服従、危険災禍に直面してのｽﾄｲｯｸな沈着、生を賤しみ死に親しむ心。(2)神道からは、国王・祖父母等への忠孝の道。(3)儒教からは、政治的倫理を背景に武士道精神を形成した。  \*私見：仏教からの影響は、良い面がある一方で、あきらめの良さ（良心への執着が希薄）、大勢に流されやすい性格につながっているのではないか。すなわち、違法と知りつつ大勢に流され付和雷同しやすいのではないか。倫理観は高いのにその倫理観はもろさも持っている。神道の忠孝の道は、権威主義（つべこべ言わず部長の指示に従え！）につながりやすいと思われる。 | 仏教 |
| 〃 | 岬龍一郎「武士道　日本人であることの誇り」：卑怯者、臆病者といわれることを最も恥ずかしいと感じるのは武士道の影響。  \*私見：これは高い倫理観につながっている一方で、ムラ社会において内部通報を抑制する要因になり（卑怯者）、あるいは不正行為に反対しにくい空気につながっているのではないか（臆病者）。 | 武士道 |
| O10.30 | D.キーン・司馬遼太郎「日本人と日本文化」：キーンは日本人の道徳は儒教をベースにしている、一方、司馬は恥やカッコ悪いという美意識が犯罪を抑制しているとの意見。  \*私見：どっちかではなく、どっちもではないのか。さらに、それ以外もあるのだろう。 | 儒教  恥の文化  美意識 |
| 〃 | 島園進「日本仏教の社会倫理」：近代仏教学は仏教の倫理性を軽んじてきたが、これを改めるべき。仏教には本来、社会倫理的な実践が大きな要素としてあった。  ⇒仏教は現代のｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽに影響ありと考えられる。  \*私見：仏教は6世紀以降国家による保護あり、江戸時代には仏教が強制されたので影響はいろいろとあるはず。そのうえで、課題は、仏教の功&罪・ﾒﾘｯﾄ/ﾃﾞﾒﾘｯﾄを峻別すること。 | 仏教 |
| O11.26 | 柳川啓一「現代日本人の宗教」：  (1)日本で戒律を守っている僧侶はいない。日本仏教は常識的な宗教概念からはずれている。  \*私見：この融通無碍な現実主義は、やはり倫理・ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽにとって罪・ﾃﾞﾒﾘｯﾄなのであろう。しかし、なぜ戒律は守られなくなったのか知りたい。（親鸞は公然と妻帯しただけで隠し妻は珍しくなかった。よさこい節♪「土佐の高知のはりまや橋で　坊さんかんざし買うを見た　・・・」）  (2)日本人は「無宗教」と自覚している者が多い。  \*私見：外国人が寺社を参拝する日本人を見たら仏教/神道の信者と思うはず（受け売り）。しかも日本人は寺社参拝という宗教行為が大好き。観光とはいえ神仏に祈っていることは確か。  日本人が「無宗教」と回答する一つの理由は、仏教/神道には入信儀式がないから（受け売り）。普通の日本人は入信の自覚なしに寺社参拝という信者としての行為をちゃんとおこなっている。  つまり、日本人は形式的には無宗教だが、実質的には仏教/神道の信者。  逆に、欧米では洗礼=入信儀式を受けても教会に行かないのが多数（受け売り）、つまり形式的には信者だが実質的には無宗教。 | 仏教  宗教 |
| O1.21 | 倫理観ではないが・・・  國廣正「それでも企業不祥事が起きる理由」：ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽは知識ではなく意識の問題。細かいﾙｰﾙを覚えてもすぐ忘れる、「なぜﾙｰﾙが存在するのか」という理由を理解させるべき。  \*私見：K4.30の「組織不正の心理学」と同趣旨。すなわち、「何々するな」「何々しろ」を教える指令型の教育は教育効果が弱い。やはり、倫理やｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽは教えるものではなく、実体験やｹｰｽﾒｿｯﾄﾞをとおして発見するものなのであろう。 |  |
| O2.19 | 金子晴男「恥と良心」：日本では共同体への献身が美徳として重んじられ、ここから日本的道徳が生まれてくる。日本では、内と外の二重道徳があり、内が固有の内面性に向かって深まらないため、外に対して極端に防衛的にならざるを得ない。こうして体裁・外聞・世間体を重んじる恥の文化が開花し、内面的な良心にいたることがなかった。 | ムラ社会  ウチ・ソト |
| K6.19 | 山折哲雄「さまよえる日本宗教」：西欧の契約社会に対して、日本の八百万の神と人間は一対一の関係になりにくい、こういう社会をまとめるには性悪説ではだめ、人間はそもそも信頼できると思うしかない、こういう社会・集団で最悪の行いは信頼を裏切る事。だから内部告発は機能しない。 | 神道 |
| K7.22 | 上野誠「日本人にとって聖なるものとは何か　神と自然の古代学」：多神教の文化では神という絶対的存在も相対化され、善と悪も相対的なものと考えられている。家庭人と組織人の倫理観が異なる、清濁併せ呑むことが評価される、など。多神教の日本文化の特徴は、ﾃﾞﾒﾘｯﾄとしてポリシーがない、節操がない、メリットとして一つの考えにこだわらない、柔軟な思考。 | 多神教 |
| 〃 | 新田健一「日本人の罪悪感」：  (1)日本人は人間関係をウチとソトに分けて身内の中では甘えの関係にあり、世間に対しては対立し無関心。主体的自我は身内の中に埋没して育ちにくい。自己が違法行為をした場合、身内がどのように思うかが最大の関心事になる。だから、犯罪者は「親に申し訳ない」など身内への謝罪の言葉がまず出てくる。本来、謝罪は被害者におこなうべきなのに。つまり、身内に迷惑をかけたという罪悪感であり、被害者に迷惑をかけたという罪悪感ではない。  (2)日本人の倫理観は和辻哲郎のいう関係性の倫理、自我が育ちにくい日本では無我の境地が理想とされ、倫理観のよりどころは他者との関係に置かれた。和とは他者との関係であり、これを乱すことに罪悪感を感じる。  (3)日本人の道徳心を支えてきたのは恥の文化、罪悪感の基になるのは身内との情緒的結合、これらが希薄になってきた。会社等の集団への帰属意識も希薄化している。主体的自我を持たない人間は罪悪感をともなわない犯行に傾斜していく。 | ウチ・ソト  和辻哲郎  恥の文化 |
| K9.19 | 土居建郎「甘えの構造」：甘えの関係にある人どうしでは少しぐらいの悪事は許されるだろうという心理が働く。上司・部下が甘えの関係にあると上司は部下のルール違反に甘くなる。（これが重なるとゆでガエル状態になり重大不祥事につながる。） | 甘え |
| 〃 | 牧野成一「ウチとソトの言語文化学　文法を文化で切る」：ウチの人間どうしの連帯感が強化されやすく、その一方でソトの世界に対して関心が薄い。世間の目（世間の評価）は気にするが世間に対して関心が薄い。  \*私見：これは、会社の仲間どうしでは相手に迷惑をかけない・助け合うなど倫理的な行為につながり（日本企業のﾁｰﾑﾜｰｸ）、その一方で一般消費者=世間に対しては痛みを感じる心が希薄になり非倫理的な行為をおこなってしまう=倫理観のダブルスタンダード。三菱自動車のリコール隠し、燃費データねつ造、などは、これが背景にあるのではないか。他の心理的要因もあるのだろうが。 | ウチ・ソト |
| 〃 | 佐藤達全「他者依存の自己意識と日本人の倫理観について」（育英短大紀要）：和辻哲郎の人と人の関係における倫理は仏教の縁起の思想から由来しており、縁起とはすべては他に依存しているという考え方。日本人の倫理観は他者に依存しており、他人に見られていなければ悪事をしてもかまわないという倫理観が出てくる。  \*私見：恥の文化を倫理学的に説明すると他者依存の倫理観ということになるのだろう。これは日本人の倫理観を説明する一つの考え方であることは確かなように思う。 | 和辻哲郎  仏教  恥の文化 |
| K11.26 | 鈴木孝夫「ことばと文化」：日本語の特徴である対象依存の自己規定においては、父親が子どもに対して「パパの言う事を聞きなさい」と言う。これは父親が子どもの立場に立ち子どもと同化している。これは相手の気持ちを察する「察しの文化」「思いやりの文化」に通じる。日本人は自分の意見を主張するのが苦手、他人の意見と調和させることが得意。  \*私見：日本人は不正と分かっていても他人の意見に反論するのが苦手のように思われる。心理学でいうところの「同調」におちいりやすい。相手の立場を思いやる、和を乱すことを恐れるためか。 |  |
| 〃 | 長野晃子「日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか」：  (1)ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄの日本は恥の文化なので他人の目がないところでは悪事に走る傾向にあるとの見方は画一的過ぎる。恥の文化だけで日本の犯罪率の低さは説明できない。  (2)日本人の犯罪抑制力は、各自の心の中にやってはいけないという内面的強制力を持っているから。日本人も罪の意識を持っている、つまり他人に迷惑をかけてはいけないという意識。これに対して欧米人の罪の意識はキリスト教の教えに背いたら神から罰を受けるという意識。  (3)日本人の罪の意識は日常的なしつけで植え付けられる。子どもを押し入れに入れて「なぜ叱られたか考えなさい」と反省をうながし、してはいけない事に自分で気づくようにしむける。これに対して欧米では、お尻をたたいて罰を与える。これは神の代理人として罰を与えている。最近までフランスの学校にはムチが普通にあった。  \*私見：恥の文化は否定されるべきではないと思うが、日本人の倫理観は一つのもので説明しきれないように思う。日本人の倫理観は多層構造なのであろう。 | 恥の文化  罪の文化 |
| K2.19 | 呉善花「私はいかにして日本信徒となったか」その他の著作：  日本開催の日本対韓国の野球の試合で、韓国選手のﾌｧｲﾝﾌﾟﾚｰに対して日本人が盛大な拍手を送ったことに韓国人はびっくりしたとのこと。  \*私見：武士道の精神か。敵に塩を送る。日本人は敵であっても優れた敵は尊敬してしまう。いさぎよさや卑怯な真似はしないという倫理観にむすびついているのであろう。 | 武士道 |
| K4.30 | 河野哲也・他「組織不正の心理学」：個人個人の倫理観が高ければ、その集団の倫理観も高くなるわけではない。個人の倫理観と集団の倫理観は別物。集団の倫理観を高めるにはオートポイエーシスを繰り返し経験しなければならない。 |  |
| K5.27 | 末木文美士「仏教vs倫理」（ちくま新書、2006年2月）  別紙 | 仏教 |

**読書ノート（その11）**

2017年5月27日　小林

**末木文美士「仏教vs倫理」（ちくま新書、2006年2月）**

* 1949年生、東大教授、仏教学、日本思想史
* 仏教に対する批判として、倫理性が欠如しているという批判あり。田村芳朗（末木の指導教授）「仏教における倫理性欠如の問題」（1991年）は以下のように述べている。なお、田村は最終的な結論を示していない。
* 倫理性欠如の根拠としては、以下が指摘されている。
* 一つはキリスト教との比較で、キリスト教は唯一絶対的な神からの命令として倫理は守らなければならないものとされている、これに対し仏教には倫理遵守を命じるような唯一絶対的な存在が想定されていない。
* もう一つは、仏教の以下の考え方から、現実の世界から逃避し、その一方で現実をあるがまま受け入れてしまうため、現実の世界における倫理に対する関心が希薄化している。(1)遁世主義：仏教は世俗超越の方法ばかり強調し、世俗内の現実の問題に無関心になりがち。（庵で一人暮らす高僧のイメージ） (2) 空・一如思想：すべてが空・無実体であり、悟りの世界として一体（一如）であるならば、そこでは善悪の区別ができなくなってしまうのではないかという考え方。（すべてが空なのだから、すべては根本において同一であるということ） (3)神秘主義：悟りの体験に究極の価値を置くため、その他のことが軽視される。（立証できない事を追求するので、客観性や合理性が無視されるということ） (4)本覚思想：無常のこの世界は無常のままで永遠の悟りを実現しており、改めて別に悟りを求める必要はない。衆生（煩悩多き一般人）は衆生のままでよく、仏になる必要はないとの考え方。日本文化へ大きな影響を与えた。
* 本覚思想と倫理について
* 無常を無常のままでよしとする発想は「徒然草」（吉田兼好1283-1352年）や芸能、茶道、華道に見られる。
* 凡夫（一般人）は煩悩を持っていてもかまわないと現状肯定することから、向上の契機が失われる。これは、どのようなことをしてもかまわないという無節操、無批判な無倫理主義に陥ることになる。
* このような論は、法然・親鸞の門下でしばしば問題になっている。たとえば、造悪無礙説（ぞうあくむげせつ）は、阿弥陀仏に救われるのであればどんな悪もなし放題であるという考え方、また悪人正機説はこのような傾向から生まれたもの。現世のすべてが認められるのなら悪行も否定されるべき理由はない。
* 袴谷憲昭（駒大教授）「本覚思想批判」（1989年）は、戦前の部落民の「差別戒名」問題の由来を本覚思想に求め、現代日本の倫理問題と絡めて取り上げている。本覚思想の源泉は中国仏教・初期インド仏教にあることを論じている。道元も本覚思想を批判していることを指摘し道元を再評価している。（袴谷は東大院の先輩にあたる。袴谷は同書で末木および梅原猛を批判し興味深い。）
* 戒律と大乗/小乗仏教と倫理
* 戒律はもともとシャカのもとに集まった修行者が集団生活するためのﾙｰﾙ。和辻哲郎のいう「人と人の間」を律する倫理。
* 大乗仏教（日本、中台韓ベ）においては、煩悩を静めるために戒律にしたがう。これが仏教の倫理的性格を形づくるが、この倫理は個人単位の倫理であり集団生活のﾙｰﾙではない。「人と人の間」の倫理ではない。
* これに対して、小乗仏教（東南アジア諸国）においては、出家者は戒律にしたがって共同生活している。出家者は托鉢で一般社会から食物を得て、一般社会の人々に教えを説くことで生活の援助を得ている。この出家者と一般社会の相互依存関係はシャカの時代から今日まで続いている。「人と人の間」を律する倫理として戒律が生きており、小乗仏教のほうが倫理性が強い。（P.63までの要旨）
* 末木は、仏教にも倫理は成り立つという見解も当然ありうるとしつつ、結論として、仏教に倫理性はなくてかまわない、むしろ仏教は死者との関係のあり方を我々に教えることに存在理由があると言っている。いわく、死者は死者として存在しこの世界を支えている。死者なしに我々は存在できない。死者を忘れたとき生者の傲慢が始まる。アウシュヴィッツ、ヒロシマ、ナガサキ等々、我々は死者の語りえない言葉に耳を傾けるべき。仏教は死者との向き合い方をこそ示すべきである。（なお、戒名にランクを付けて売っている今の仏教は衰退するしかないと。）

 小乗仏教の国タイの出家僧の托鉢

以上